

論文の和文概要

制野 俊弘

(博士論文の題目)

体育授業におけるリレーの教材づくりに関する 実践的研究

(博士論文の概要)

本研究は、戦後の教育学と体育科教育における教材論の成果と課題を明らかにするとともに、戦後のリレー実践の動向やリレーの歴史研究を踏まえて、リレーの新たな教科内容とそれに応じた教材づくりについて、実践的に明らかにすることを目的とする。

リレーのようにルールが揺れ動く運動文化財を背景にもつ体育の授業では、児童生徒を「スポーツを消費する対象」ではなく、「スポーツを発展的に継承し、新たに創造する主体」として教育する必要がある。また、コンピテンシー・ベースの教育とコンテンツ・ベースの教育の二項対立図式の問題、さらには児童生徒に広がるニヒリズムに対して、体育は何ができるのかを、リレーの教科内容研究と教材づくりを通して明らかにしたいと考えた。

各章の課題は、以下の通りである。

〈第1章〉戦後の教育学や体育科における教材論の系譜を辿り、その成果と課題を明らかにするとともに、他教科（本研究では「技術科」）における教材論の展開について検討し、体育科における教材論を検討するための基盤となる知見を得る。

〈第2章〉戦後の体育科教育における教材論について、岩田の研究を参考に、教育学との関係や体育科教育の関係者の議論の系譜を整理し、現在の到達点（成果と課題）を明らかにする。その際、特に、体育における教材論の系譜を辿るにあたり、体育の「学力」論議の端緒を拓いた学校体育研究同志会の研究を中心に考察する。

〈第3章〉学習指導要領におけるリレーの捉え方の変遷や、戦後のリレー実践の全体的動向を分析し、成果と課題を明らかにする。また、岩田が明らかにした教材論における諸概念による実践分析を通して、体育科における教材論のあり方を検討する。

〈第4章〉リレーの教科内容の析出にあたり、リレーの発祥地であるペンシルベニア大学での現地調査を含めたリレーの歴史研究を行う。特に、リレーの発祥、走距離の変遷、ゾーン設定に関する知見を得ることで、新たな教科内容と授業構想の方向性を提示する。

〈第5章〉第1～4章までの研究成果をもとに、教科内容試案と授業構想案を提示し、それに基づく新たなリレーの教材づくりと授業実践の分析を行う。その際、特に、序章で述べたリレーに対する「なぜ？」を踏まえて、「どこでバトンパスをしてもいいリレー」（「不等距離リレー」）の教材としての可能性や課題を明らかにするとともに、関連実践（岡崎実践）との比較・分析を通して、本研究が提示するリレーの教材づくりの課題、および授業実践に取り組む際に必要な諸条件を明らかにする。

以上の研究から、次のような結論が導き出せる。

- (1) 体育における教材は、教科内容を教えるための「手段」、**「生活概念と科学的概念の『対立物の統一』」**、さらには**「実生活上の生活概念と最先端のスポーツ科学や運動文化財の抱える課題の『摩擦点』」**の三つの側面がある。特に、三つ目の側面は、矛盾を孕んだ運動文化財を文化的背景にもつこと、技能の習熟が直接的な目標となることから、**家庭・地域・社会の課題が反映した児童生徒の生活課題（能力観や人間観等）が問われることから、それらが教材を媒介に輻輳的に反射することが指摘できる。**
- (2) 教材づくりには、主に教師側が追究する**「運動文化財（文化的素材）→教科内容→教材→授業」というルートと、そこから反転して教師と児童生徒がともに追究する「授業→教材→教科内容→運動文化財」の逆ルート（「循環構造」）が存在する。**この場合、最初の出発点にある運動文化財（文化的素材）は、「逆ルート」により、新たな視点での再検討が迫られることとなる。さらに、この「逆ルート」の存在は、教師と児童生徒はともに運動文化財に問いかける共同主体となる可能性を示している。
- (3) 児童生徒の「観」を揺さぶるきっかけとなるのは、現実の世界をうつしとってきた科学的概念や芸術的テーマであり、体育では運動文化財がこれにあたる。したがって、この運動文化財のどこに焦点をあて、どこを切り取るかが課題となるが、本研究では、歴史の主流を歩んできた運動文化財のみならず、一度地下に潜った運動文化財も含めた、より広範で深遠な掘り起こし作業の必要性が明らかとなった。
- (4) 「手段論」を中心とした教材概念を体育にあてはめるだけでは賄いきれない課題が取り残されてきた。体育は、科学的概念と自分のからだを含む既存の生活概念との接触・摩擦・葛藤・矛盾によって成り立つ教科である。それを媒介するとともに、意味ある運動文化財（文化遺産）として再構成する足掛かりを与えるものが教材である。
「観」の形成を含む生活概念、そして運動文化財そのものの変容（再構成）を意図した教材が用意されることによって、教材はその本源的な力動性を存分に発揮する。